

Rotary



# 2016~2017国際ロータリー 第2510地区第9グループ 第45回都市連合会

(INTERCITY MEETING)

## パネリスト

西いぶり生涯活躍のまち  
構想推進協議会会長

伊達市長

菊谷 秀吉氏



室蘭市長

青山 剛氏



登別市長

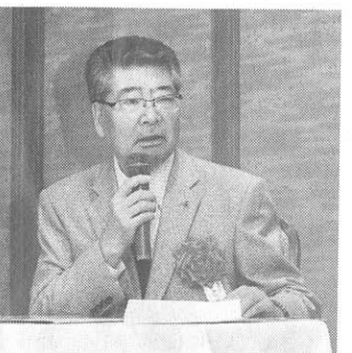
小笠原 春一氏



## コーディネーター

工藤 志

室蘭民報社代表取締役社長



# 生涯活躍のまちへ連携

## 西胆振の将来考える

2016~2017国際ロータリー第2510地区第9グループ(廣瀬禎ガバナー補佐)の第45回都市連合会(IM)がこのほど、室蘭市中島町のホテルサンルート室蘭で行われた。西胆振3市長を招いたパネルディスカッションでは、「西胆振3市3町『生涯活躍のまち』について」をテーマに、菊谷秀吉市長と青山剛室蘭市長、小笠原春一登別市長が、伊達市を先行モデルとして「西いぶり生涯活躍のまち構想推進協議会」の事業を推進する考えを示した。コーディネーターは室蘭民報社の工藤志代表取締役社長が務めた。当日の様子を紹介する。

## 3市長パネルディスカッション

工藤社長 定住自立圏構想の広域連携を強めながら、西胆振版CCRCC構想を策定して進もうという段階になっている。全体像について菊谷市長にうかがいたい。

■アクティブシニア  
菊谷市長 CCRCCについて国と全く考え方は違う。国の考えは「ゆるゆる」で捨て山に近い。われわれが求めるのは、アクティブシニアの層。アクティブシニアは、地域に入り地域に解け込むこと。そういう社会を目指すことで、地域自体がアクティブシニアになる。

移住政策で感じたのは、「なぜ伊達に来るか」ということ。「なぜ」を



事業構想について説明する西胆振3市長。左端は工藤社長

つくりさせないといけない。気候がいいだけでは来ない。本州から来るには、なぜそこに来るかを講義する必要がある。一生住んでもらうという発想を止めよう。気に入ったら住んでもらう仕組みに変えたい。1~3年のロングステイをする。例えば室蘭に1年住み、不動産を売らないで来るなら、いつでも帰ることができるといふ安心感がある。いろいろな選択肢を情報として提供したい。

## 医療・福祉の充実

青山市長 伊達市を中心にモデルをつくる。趣味のサークルやクラブ活動、仕事などがなければ、単なる旅行で終わる。暮らしと旅行は違う。泊は単なる旅行。室蘭市も1週間、1カ月のスパンでお試し居住やっている。室工大出身者や親戚が近くにいるケースはあるが、縁もゆかりもない人のハードルは高い。西胆振に何かしらきつかけがある人が来るのが現実的だ。

室蘭市は、全国の3000の二次医療圏の中で医療、福祉施設が充実しているという高い評価をいただいている。足元は、地域医療構想では、2025年の必要病床数が2800で、今より1000削減される。若い医師の研修が減っている現実もある。魅力を持続するためにも、医療活動をするための取組を進める必要がある。西胆振の定住人口につながる。



「西いぶり生涯活躍のまち構想推進協議会」の取り組みについて理解を深める出席者

場。年配の人が働くために、シルバー人材センターが使える。2つ目は医療介護。17年度中に地域包括ケアシステムの総合事業を各まちが構築して、18年度から実施しなければいけない。介護、医療、薬の部分が大きく関わる。3つ目は公共交通利便性の変化。4つ目は空き家の活用。5番目はコミュニティクラブの活用。広域のコンシェルジュを伊達に置いて対応したい。室蘭、登別はコンシェルジュを指導するために、両市の情報を伊達市に集める必要がある。伊達はウェルシー構想のイメージが定着している。ここが大事。室蘭は工業、登別は観光。伊達がとっかかりとしていい。

菊谷市長 民間が力になつていない。役所が絵を描くのは難しい。われわれが目指すのはビジネス。産業として成り立たせるために、民間が積極的に取り組んでほしい。移住を推進しても、不動産の受け皿がないとできない。伊達に来るには、来るだけの目的がある。来る人たちの情報を集めて、提供する下地をつくる必要がある。皆さん会員になってもらいたい。例えば、「追直漁港で釣りをするから集まれ」というメールを送るとする。10人ヒットして来てもらうコミュニティがあってもいい。そのため情報収集した。情報を受け手がいないと困る。手間は掛かるが、できる範囲で取り組みたい。

工藤社長 広域的に進める上での課題と解決に向けてアプローチは。

青山市長 17年度はコンシェルジュの取り組みを進める。宅建協会の協力を得て、空いているアパートの一室をマンスリー、ウィークリーマンションとして家具を用意して、長期間住んで釣りに山登り、温泉を楽しむ取り組みを進めたい。来年12月に生涯学習センターが完成する。西胆振の拠点と位置付けており、横にホテルも建つ。教室をシェアリングに活用して、横にホテルのネットワークを活用して情報発信できれば、具体的に進めたい。ゆくゆくは住民票を室蘭に移してほしい。

■対流に発展させる

小笠原市長 観光の観点から話すと、交流人口を増やすことで、滞在してもらえる滞留人口も増える。行き交う対流に発展させるCCRCCになってほしい。コミュニケーションの点で言うと、登別では08年にのほのほを設けた。センターに行き交う市民の交流を滞留・対流させないと、まちは活性化しない。ただ交流するだけでは利潤を生まないう。組織の形態は別として、やりがい、生きがいを見つ

ける場所をマッチングさせる必要がある。

工藤社長 任期中にどんな決意でこれからのまちづくりを進めるか。

青山市長 人口減少の中で、公共施設をどう集約するか。市場の更新は、観光客が立ち寄り西胆振を楽しむ工夫を盛り込みたい。18年のフェリー就航に向けたターミナル改修も進めたい。22年には室蘭開港150年市制施行100年の大きな年を迎える。都市計画マスタープランも講じながら、17、19年の3カ年かけて、港湾計画見直しを行い、実を20年ぶりに。北海道の物流を支える室蘭を活性化させたい。3.総合病院の連携を深める中で、市民が安心して暮らせる医師確保が課題。若いドクターが活動できる施策を、医師会と相談して発信したい。

小笠原市長 私の責任は西胆振の観光資源を世界にどう発信するか。20年に向けて大事なことは、安全安心な交通網を整備すること。フェリーもそうだ。陸海空含めて安全であれば、魅力だけでなく安心感を覚えて観光客は来る。ちょっとした事故があると風評被害で来なくなる。何とか安全な交通網を整えたい。人と旗の波運動で、17年度からハンブルと英語、中国語の旗を西胆振全体で持たたい。ロータリー、ライオンズも運動を実施しており、多言語でお願いしたい。

菊谷市長 西胆振3市3町はよくまとまっているといわれる。大事なことは、住む人も西胆振市民の発想で取り組むと連携が取れる。伊達市の知名度はないが、「行ってみたい」と思っている場所がある。「これだ」というポイントがある。人は見つけてくる。目的を持って伊達市に来てもらうまちづくりをすべき。3市それぞれに役割がある。今後とも連携を取りながら頑張りたい。